



「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第4回（9月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

中国の院士と日本の先生

海南省 付饒

風雨の40年が経ち、中日国交正常化も40周年の日を迎えた。二十数年前、中国海洋石油工業の対外協力が始まった頃、日本が私達の“先生”だったことを知る人は少ない。

1979年、鄧小平が南シナ海に深センという“特区”を設定し、ほぼ同時に、党と国家指導部が大海原に海洋石油工業という“特殊産業”を囲い込んだ。1982年1月30日、『中華人民共和國 対外協力海洋石油資源採掘条例』が公布され、海外の事業者が中国に進出し協力事業として海洋の石油を探查開発することに法的な保障が与えられた。

こうした経緯から、私たちは広大な渤海で外国からの客の第一陣を迎え入れたのである。1985年、中日協力による埕北油田Bプラットフォームが竣工して生産を始めたのだが、日本側は“作業員”を担当し（石油契約規定により実質的な作業の実施を担い）、中国側はそれぞれの持ち場に人員を配備して作業補助と学習を行った。大和民族の厳格さと団結力は、当時の中国の技術者に深い印象を残した。

Bプラットフォームについては、新日本製鉄、三菱重工、日本鋼管、三井造船、石川島播磨重工などのメーカーが5つの地区に分かれて建設したのだが、当時では最先端の技術と設備が使われた。Bプラットフォームが中国の渤海で竣工された後、中国の従業員はこの非常に巨大な物に対して好奇心と物珍しさを覚えた。西南石油学院の1982期卒業生、周守為氏は、業務に参加してわずか2年で中国側の操作係長という責務を課せられた。埕北油田Bプラットフォームに上がった初日、彼は引き船の上で何時間も揺られ、その上一刻の休憩もなく焼却炉の故障処理にあたっており、この巨大な代物を細かく観察する余裕さえなかった。しかし、日本側の岩崎副鉱山長は、当日の生産が終了した時、日本の管理理念により、彼に当日のプラットフォームの生産データを尋ねたのである。周守為氏が直ぐには答えられずにいると、岩崎氏は国内外の労働者の前で彼を叱責したのである。「君は操作係長なんだから、このあたりの状況は掌握しているべきだ。」周守為は、一言も弁解しなかった。

彼が弁解しなかったのは、海洋石油システムに関する愛国主義についての討論に参加したことがあったからだ。日本などの国の先進的な採油設備について考察することにより、中国海洋石油の人々は“遅れているのを認めないことが、愛国主義ではない”と明確に理解していたのである。当時、“国際標準と統合”、“先進技術と現代的な管理を掌握して外国のパートナーに追いつき追い越せ”、“共にWin-Win”といった言葉が中国海洋石油の内部では流行していた。

それからというもの、この若者は昼間には黙々と日本の専門家の操作を観察し、夜になると深夜まで日本側が提供した資料にかじりついていった。日本側も重要な技術を隠すことなく、中国側の作業員に設備を十分に熟知させ掌握させていった。約2年の時を経て、周守為氏を代表とする中国側作業員は、日本側に提供された英文の図面資料100数枚を全て“飲み込み”、1本のパイプがどのくらい曲がっていて、いくつのバルブがあるかということまで、全てを明確に理解した。

1987年のある日、周守為氏が飛行機のプラットフォームの上を散歩していた時、彼はプラットフォームの中国側の鉱山長に「こいつの事情は明確に飲み込みました」と話した。中国側の鉱山長は慎重に考慮し、中国側が単独でBプラットフォームを操作したいと日本側へ厳粛に願い出た。日本側の田中鉱山

長はこの申し出に対して非常に慎重であり、中国側がプラットフォームの操作技能と管理理念をマスターしているか否かをテストしてから判断することにした。日本の試験官は厳密に出題、試験監督、評価を行い、中国の受験生達はそれ以上に厳密に回答した。結果は、ただ1人の労働者が化学の基礎知識不足で不合格になっただけで、残りは全て優秀な成績で、周守為氏は答案用紙に価値ある見解をいくつも出した。田中鉦山長はその時既に60歳近くになっていて、日本の石油界では非常に声望が高い鉦山長であったが、中国の学生達の成績に満足して頷いたのである。

1987年6月15日は、中国海洋石油の人間には忘れられない日である。この日、中国側の鉦山長の“始動”の一声により、埕北油田の操作担当者の地位が日本側から中国側に移動したのである。このことは、中国の労働者が初めて単独で国際標準により近代的な海洋石油採掘設備を操作したことも意味するのである。

1998年、当時の日本側鉦山長の田中氏と中国側操作係長の周守為氏が再会した。田中氏は多くの中国側の従業員と結んできた友情を心おきなく話し、「中国人は近代的な油田をきちんと管理できるだけでなく、安全と環境保護の面では更に見事である。」と語った。2000年10月、埕北油田の中日協力開発契約が正式に終了し、油田は自営生産に移行した。2009年、かつて操作係長を務めた周守為氏が中国工程院の院士に当選した。埕北油田という27歳の勲功ある油田は、今なお絶えず祖国に原油を送り込んでいる。そこに記された中日友好の情は、周囲の果てしない海のように、永久に存在し続けるだろう。

※他の優秀賞2点については、公表され次第、掲載します。